



杏雨書屋(きょううしょおく)は大阪市にある公益財団法人武田科学振興財団が運営する図書資料館。国宝や重要文化財のほか、国内でもトップクラスの古医書を収蔵しています。このコーナーでは先人が古医書に残した現代に通じるメッセージを、小曾戸先生に紐解いていただきます。

其ノ巻 漢方薬学が考える 3種類の薬とは？

案内人◇小曾戸 洋
(北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部 部長)



杏雨書屋蔵 『新修本草』巻15

古医書には先人が試行錯誤の繰り返しのうえに築き上げてきた医学・薬学の英知が詰まっています。シリーズ開始にあたり、まずは漢方薬学の思想背景に触れておきたいと思います。今回紹介するのは国の重要文化財に指定されている『新修本草』(巻15)で、杏雨書屋の所蔵品は、鎌倉時代、今から800年前の写本です。

中国では薬物学のことを本草といいます。最も古い本草書は2000年前の漢の時代に作られたとされる『神農本草経』3巻で、365種の薬物(生薬)を収載しています。のち紀元500年頃に陶弘景という人によって注釈が加えられ、『本草経集注』7巻となりました。本書は個人が作ったものですが、唐の時代になると政府が医薬行政を司るようになり、659年、皇帝の命令を受けて中国初の国定薬物書が編集されます。これが『新修本草』で、全20巻、850種の薬物を収載して解説が加えられています。いわば『日本薬局方』初版に相当するような公定書です。

『新修本草』は奈良時代に遣唐使により日本へ伝えられ、わが国の薬学の手本とされました。杏雨書屋の『新修本草』には、731(天平3)年に田辺史が写本したという記載があります。8世紀初めに『新修本草』が日本に伝来していたことを示す貴重な証拠です。

中国の本草では薬物を効能によって上・中・下の三

ランクに分類します。これを本草の三品分類と称しています。上品の薬は養命薬といって生命(精神と肉体)を養い、身体を軽快にし、元気を益し、老化防止・長寿効果がある薬剤です。中品の薬は養性薬といい、病気の予防、滋養強壮効果があるもの。下品の薬は治病薬で、邪気を排除し、病巣を破壊する作用があるものがこのカテゴリーに入ります。

すなわち健康維持、栄養剤を上位に置き、病気の治療薬を下位に置くのが中国薬物学の基本で、その背景には養生第一主義の思想があるのです。何百年もの時間をかけて組み立てられてきた漢方薬学において、養生(健康維持)が最重要視されていることは、とても興味深いことです。

次回からは、中国・日本の医薬古典より具体的な事柄を紹介していきます。

漢方薬学では養生が第一。
健康維持、栄養剤が薬のなかでは
最も価値の高いものなのです。



小曾戸 洋(こそと ひろし)

1950年山口県下関で小曾戸薬局を営む小曾戸丈夫氏の長男として生まれる。宋の時代に散逸した貴重書「小品方」の発見や馬王堆(まおうたい)という中国湖南省にある紀元前2世紀の遺跡で発見された医書の解読により、中国でも医史学研究で著名な成果をあげる。最近では宋版「孫真人玉函方(そんしんじんぎょくかんほう)」を発見し話題に。主な著書「日本漢方典籍辞典」(大修館書店)、「中国医学古典と日本一書誌と伝承」(塙書房)、「漢方の歴史—中国・日本の伝統医学」(大修館書店あじあブックス)。